

## 天津へ虫凧を求めて

相坂 耕作

本年2月に息子と北京へ行き、万里の長城、故宮へ観光し、目的であるセミ殻人形(毛猴)入手を成しとげた。その時にトンボ凧とムカデ凧を少々買い求め持ち帰ったが、残念ながら筆者の求める珍虫凧は手に入らなかった。そのため今回は凧のメッカ天津へ珍虫凧を求めに行くことにした。

### はじめに

筆者の私設資料館「播磨昆虫民俗資料館」には多くの虫凧を所蔵している。その中にはムカデ凧とともに昆虫凧としてセミ、チョウ、トンボ、バッタなどがみられる。筆者は日本の凧の会会員で、虫を形取った、虫凧収集を国内及び国外に行っている。まさしく昆虫の民俗資料として十分な価値があると思うからである。中国の凧もかなり以前から収集しており、今回、北京を拠点に北京凧、天津凧を入手したので雑文ではあるが紀行文を書いてみた。

尚、今回は家内と数えて結婚25周年目となり、いわゆる銀婚記念として旅行したもので、家族や身内のものに多分の御厚志を戴きました。紙面に厚く御礼申し上げます。

### 草編細工を入手

第1日目(1997.9.13)北京空港到着後、現地係員の女性と共に5ツ星の宿泊ホテル京広新世界飯店に到着。このホテルは1990年にオープン52階建ての北京一の高層ホテルで輝く外観が目立つホテルである(写真1)。早速、前回訪問した「毛猴(マオフォウ)」作家、曹儀簡氏宅へお土産を届けるべく係員に連絡をとってもらい、今日夕方5時に訪問出来るようになった。不思議なことに、現地係員がホテルにある公衆電話でかけようとしても長時間つながらずあきらめ、フロントの電話を借用したら瞬時に電話がかかるという中国の不可解さが知れた。暫く休憩後、タクシーに乗り北京友誼

商店分店へ、早速物色したのち長富宮飯店へ行く。明後日の天津行きのオプションツアーの予約を入れるべくホテル内のJTBデスクに立ち寄った。デスクではついでに曹氏宅へいく順序を聞いてもらった。前回いっても全くわからないものである。長富宮でタクシーに乗車し、何とかタクシーの運転手は曹氏宅にて降ろしてくれたが、いかんせん約10倍の値をふっかけてきた。メーターを倒したままでおかしいと気づいていたが、日本円の約3,000円くらいなので喧嘩することなく無事着いたのでチップ代わりにくれてやった。何しろ前回の靴づれを考えると全く楽に到着した。

曹氏宅へ行くと曹氏はよく覚えていて下さって手厚い出迎えをうけた。曹氏は勉強をされていたらしく机には書類がいっぱいになっていた。何かしておられるのですかと聞くと、中国四大小説の一つ「紅桜夢」の改編をしているとの事であった。そういえば曹氏は「紅桜夢」作者、曹雪芹氏の子孫にあたる方であったことを思い出した。前回訪問から半年ではあったが、元気なお姿を見せて戴き喜んでいる。しかし、身体はまだ少々不自由なのか「毛猴」は全く作成されていないようで、作品はむしろ少なくなっていた。それにも係わらず家内と筆者に一つずつ「毛猴」をプレゼントして下さった。部屋を見渡すと江沢民総書記と人民大会堂前で撮影された写真を飾っておられ、かなりの有名人と知った。明日の予定を聞かれ、鬮蟋(コオロギ相撲)の道具を物色する旨を話すと曹氏所有の草編みの鬮蟋をもプレゼントされた。帰国後調べると、その草編み細工は、ラストエンペラー清朝最後の皇帝愛新覚羅溥儀と同じ「満族出身」の草編み工芸師で、愛新覚羅裕庸氏の作品であることが分かった。氏の作品は美観細密であり、国の内外での評判が高く「満族代々に伝わる伝統工芸の唯一の継承者」でもある。全く唸りたくなるような作品である。前回訪問時に戴いた草編みのセミも

その緻密さから同氏製作に違いないと思った。

家内を含めての記念写真(写真2)の後、曹氏宅を離れタクシーを拾い友誼商店へ、その後夕食、ホテルへ帰った。

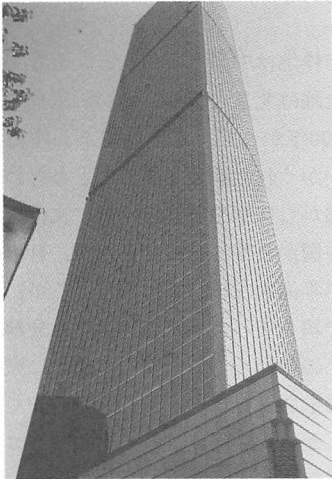
### 食用としてのセミ

2日目(1997.9.14) 前から調べていた所で、ここなら闊蟻の道具があるだろうという龍潭湖付近にある自由市場へ出かけた。普通、旅行案内書を見ていると観光者が多いところは本に出ている。例えば衣料品で有名な秀水市場などは有名な市場である。今回行った自由市場は外国人の姿もほとんどなく、お国の人が大半を占めている。逆にいえば日本語の通じない危険ゾーンなのかも知れない。市場へ入っていくと一番最初に目についたのが紙箱ではなく、紙包装の蚊取線香で素朴そのもの。早速購入すべく多少銭(トウシャオチェン=いくら)とやっところ1元(約15円)という。あまりの安さにびっくりした。包装紙の印刷を見てみると河北省製造で除虫菊使用となっている。色こそ日本のように鮮やかな緑色でなく、黄緑色で効き目こそ分からないが入手して喜んだ。そして同じ店には何とセミの玉が売っていた。前回訪問した万里の長城付近で買い求めたセミ玉の約1/50の値段である。あまりの安さに開口した。それも2つ買うからといってまけさせた。足を進めると、やっとう目的のコオロギの飼育道具等が目に入ってきた。手作りの虫籠などを、人もはばかりのような値段で買い求めた。そのうち、やっこの目で一度見たいと思っていたキリギリスの流し売りの光景に出会った。何百とぶらさげたキリギリス籠からはうるさい鳴き声が響いている。籠こそ入手していたがキリギリスを入れたままのは初めてで、早速買い求めた(写真3)。1籠2元(約30円)であった。全く不思議でたまらない。この虫を入れる入り口のない竹製(葦の茎?)の虫籠で、いったいどうしてキリギリスを籠に入れたのか、また、成長するのに餌をどうやるのか全く不思議であった(後日その謎は解明できた)。今度は風が売っていた。ツバメ風の中にセミの絵のあるセミ風を発見

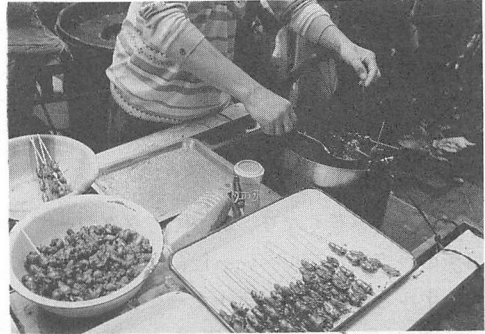
したが、分解できないことと、手持ちで持ち帰ることを考えると購入を断念した。同じ店でトンボ風を発見。昨日ホテル売店で250元していたのが10円で売っていた。色違いを3ヶ買うからという25元となった。中国は買うところによって全く値段が違う。

今度はコオロギ売りに出会った。金網の大きな虫籠に、大変多くのコオロギを販売しているのである。コオロギの種類はツヅレサセコオロギと思うが、買っている人は真剣そのものである。筆者もつい1元紙幣を出して買ってしまった。数十頭はあるだろうか、ビニールの中へ古新聞の紙片とともに入れてくれた。おそらく蟋蟀(コオロギ相撲)の選手に育てるためのコオロギに違いないと思われる(写真4)。そして暫く歩いていると、全く予想もしていなかったセミの幼虫を屋上で売っていた。昔、日本でも長野県などのリンゴ園で害虫として大発生したセミの幼虫に困り果て、ついに食用として唐揚げにしたり、缶詰にしたという。飽食の時代の現在では、珍味としてしか食べないようだ。タイなどではセミを食べることは聞いていたが中国の首都北京でも食べるとは思わなかった。1串1元(約15円)で食べさせてくれたが、案外こぼしく美味しかった。作り方は、セミの幼虫を尻の方から竹串で3頭刺して油で揚げ、それに味付け用にコショウのような香辛料を2種類ふりかけ売っていた(写真5)。ついでに食べる話であるが、鉄板に薄い小麦粉を広げ、中に卵を割り広げ、中に揚げたフライ状のものを入れ、さらにネギを加え、醤油をつけたお好み焼き風のものが売っていた。大変熱くとても美味しかったが、それを包む紙が日本で昔使っていた落とし紙の悪い紙みたいで急に食欲が落ちた。歩いていると時々テレビ等で見る頭の上から包丁で麺を切る刀削麵(タオシアオミェン)の麵料理を見かけたが、試食はしなかった(写真6)。

市場を離れることにして一度ホテルへ帰り休憩の後、今度は絹製品で有名な秀水市場を物色した。こちらは有名すぎてやたら外国人が多いところである。色々なものを買ひもめたあげく、最後に



①



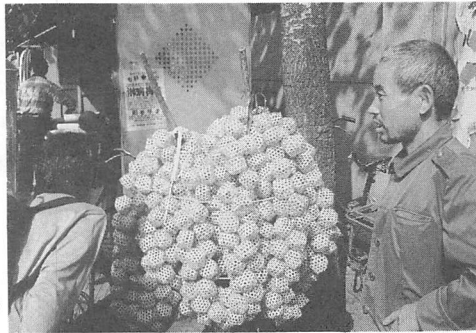
⑤



②



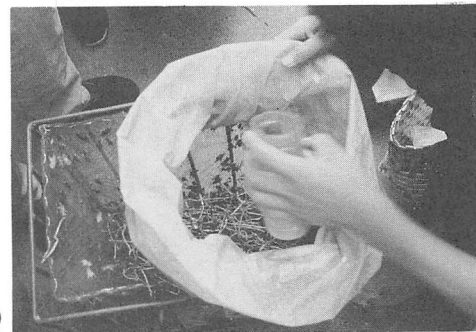
⑥



③



⑦



④



⑧

はよく知られている毛沢東グッズのライターを買った。しかし中には火をつけても毛沢東を讃える曲がならない不良品も結構多かった。夕食を済まし友誼商店でショッピング後ホテルへ帰り明日の天津行きを夢見て寝ることにした。

### 天津へ風を求めて

3日目(1997.9.15) 朝早くから宿泊ホテルでバイキングを食べ遅くなり、あわててタクシーで集合場所の長富宮ホテルへいった。よく出てくる長富宮ホテルとは日本のホテルオークラの合弁で、万里の長城の「長」と富士山の「富」とった名称で、日本人が主に利用する日本語が自由に通じる5ツ星ホテルである。さて、ホテルで「ウスイ」という男性と、ドライバー、ガイドそして筆者夫婦の計5名でマイクロバスを天津に向け出発した。天津と云えば日本では甘栗でよく知られるが、少々触れてみると、天津は天京(北京)への津(渡し場)から名づけられたという。北京の海の玄関口で、かつての租界地の名残をとどめる洋館が点在する市街は緑豊か。東は渤海に望む新港をもつ天津は人口約880万、上海、北京に次ぐ第3の都市で中央直轄市である。

明代に江南から北京へ食料を運ぶ中継地として栄え、清代に交易港として繁栄、1840年のアヘン戦争以後8カ国の租界が海河の左右に設けられ今も当時の面影を残している(写真7)。天津は神戸市と友好都市でもある。その天津の古文化街へ行ったが土産物の風はありふれたものばかりであった。後、天津食品街で昼食をとり、水上公園へ行った。途中大きなヤブヤンマ風のトンボをマイクロバスの中でみた。水上公園ではシオカラトンボ風のトンボとショウジョウトンボ、またウスバキトンボは多かった。昆虫ではツチバッターや大きなカメムシ、キタテハをみたが、本当に昆虫の姿は少ない。オブショナルツアーでたいへん高い金を払ったわりには風があまり入手出来ず残念だった。しかし天津の帰り道、ガイド氏が天安門広場へ立ち寄り風揚げを見せてくれた(写真8)。そこで中国の風について少々記すると風は中国で風箏と書

き、発祥地は中国と言われる。そして中国の風の有名な地は北京、天津、維坊、広東であるが、中国4,000年かつ広大な土地であるゆえ、まだ知られないかくれた産地もあることと思われる。日本は中国から文字や思想を学び、文化を形成した。風も中国から学んだ訳であるが、日本の風はほとんどが平面的な紙(和紙)風であるが、中国では立体的で絹を使った風が多い。また分解できる構造が多い特徴がある。天安門でヤミに売っているチョウの形をしたフータン(風弾)を安く買い求めたのはよかった。帰りはハードロックカフェにより、息子に頼まれていたトレーナーを買いもためホテルへ帰った。ホテルでは日本へ接近中の台風19号のニュースばかりみていた。

### 帰 国

4日目(1997.9.16) 集合時間を聞いていなかったで現地の旅行社へ連絡し、不安だったが近くのデパートへ最後の買い物に行った。午前11時頃現地案内人がべこべこ頭をさげながらやってきた。搭乗手続きこそ分かっているものの、やはり現地での係員がいないと不安そのものである。北京空港では台風19号の接近で関西空港の連絡橋が不通になるおそれがあるので早く出発するとのでJAL職員の説明であったが、実際には時刻より遅れ離陸した。いかにも中国的である。何とか無事到着。台風の影響も少なく無事帰国できた。